

笹子廣家文書

(採訪時住所 千葉県安房郡千歳村白子)

目録番号	年号	西暦	干支	閏	月	日	表題	作成	宛名	形態	数量	備考	整理番号
1	明治42	1909			1	28	米代金出入帳 (～明治42年12月15日)			横帳	1		2
2	明治43	1910			10	10	苞買置帳 (～大正8年9月)			横帳	1		3
3	明治45	1912			4	1	春巾着入金帳 (～大正11年)			横帳	1		8
4	1	大正 2	1913	癸丑		5	春巾着網入用帳			横帳	1	紐に3通 (4-1-1, 2, 3) 文書が括られている	9 1
4	1	1	大正 7	1918		3	6 手形期日通知書	安房國北條町 株式会社安房銀行	笹子栄次郎殿	切紙	1		9 1 2
4	1	2				7	6 (干鯛4俵借用願)	大貫 立川福蔵㊦	千歳村白子笹子 丑松殿	切紙	1		9 1 1
4	1	3				12	16 (石井和助分5俵, 金1円55銭覚)	黒川為二郎	笹子様	切紙	1		9 1 3
4	2		大正 3	1914	甲寅		5	1 春巾着網入用帳		横帳	1	紐に1通 (4-2-1) 文書が括られている	9 2
4	2	1					(魚生売りの覚)			切紙	1		9 2 1
4	3		大正 4	1915	乙卯		5	1 春巾着網入用帳 (～大正5年)		横帳	1		9 3
4	4		大正 5	1916	丙辰		5	春巾着網入用帳 (～大正5年7月7日)		横帳	1		9 4

目録番号	年号	西曆	干支	閏	月	日	表題	作成	宛名	形態	数量	備考	整理番号
4 5	大正 2	1913			11	30	春巾着網入用帳 (～大正6年6月15日)			横帳	1		9 5
4 6	大正 7	1918	午		5	1	春巾着網入用帳			横帳	1		9 6
4 7	大正 8	1919	未		5	1	春巾着網入用帳			横帳	1		9 7
4 8	大正 9	1920	申		5	1	春巾着網入用帳			横帳	1		9 8
4 9	大正10	1921	酉		5	10	春巾着網入用帳			横帳	1	紐に1点 (4-9-1) 文書が括りつけられている	9 9
4 9 1	大正10	1921			8	29	証 (記念道路寄付金5円領収につき)	健田村瀬戸漁業組合	笹子栄次郎	切紙	1		9 9 1
4 10	大正11	1922	戌		5	10	春巾着網入用帳 (～大正14年12月2日)			横帳	1		9 10
5	大正 5	1916	辰		1		麦酒苞金出入帳 (～大正13年11月)			横帳	1		4
6 1	大正 7	1918	午		10	1	秋刀魚網入用帳 (～大正8年)			横帳	1		7 1
6 2							(食料等代金書上)			切紙	1		7 2
7 1	大正 8	1919			1	29	記 (外皮, 金11銭受取につき)		安西様	切紙	1		5 2

目録番号	年号	西暦	干支	閏	月	日	表題	作成	宛名	形態	数量	備考	整理番号
7	2	大正 8	1919			9	麦酒苞買入帳			横帳	1		5 1
8		大正 8	1919	未		10	秋刀送留帳（～大正9年11月29日）			横帳	1		6
9		昭和10	1935				自昭和九年四月一日至昭和十年三月卅一日 第拾四期営業報告書	銚子市新生一丁目地先千葉縣水産株式会社		書籍	1		11
10						1 3	(味噌9貫600目他金銭書上帳)			横帳	1	大半が白紙	1
11							(北海道から昆布の採集など商売に関する書状)			切継紙	1		10
12							(祭魚洞書屋収蔵古文書封筒)			封筒	1	探訪記録あり	12

解題 笹子廣家文書

史料の概要と特色

今回公刊の「笹子廣家文書」は、昭和 24 (1949) 年水産庁の委託により財団法人時代の日本常民文化研究所 (アチックミュージアム) が全国の漁村史料を調査収集した時のものである。現在は、独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所に所蔵されている。

採訪時の住所は「千葉県安房郡千歳村白子」と記されている。これらの文書は、明治 42 (1909) 年～昭和 10 (1935) 年の間に作成されたものですべて近代文書である。水産資料館時代の旧整理、昭和 49 (1974) 年～昭和 54 (1979) 年においては、総点数 11 点 (袋) に整理され保管されてきたが、今回の再整理の結果、総袋数 21 袋、総点数 28 点となった。当時の記録によると、「1949 年 12 月 3 日採訪、1951 年 6 月 13 日返却」とある。借用書には、「文書類は返却、帳簿類 19 点は永久寄託」となっている。永久寄託として現在所蔵されている文書は書状と冊子が各 1 点、他はすべて帳簿類である。これらの帳簿に、こよりの括り付けが多少あったため、枝番号を付して整理した結果、文書点数が増加した。今回の再整理・調査の結果、旧整理以後の文書の移動や紛失はなかった。なお、1975 年公刊『水産庁水産資料館所蔵古文書目録』にも同史料目録が掲載されている。白子は、現在の千倉町の東端から丸山町にかけての太平洋側に面した地域である。千歳村は、明治 22 (1889) 年～昭和 29 (1954) 年の自治体名であるが、白子、川合、久保、安馬谷、峰の近隣の旧五ヶ村が合併して成立した村である。白子は明治 22 (1889) 年からは千歳村の大字として、昭和 29 (1954) 年からは千倉町の大宇となつてその名が残り現在にいたっている。しかしながら、昭和 30 (1955) 年からは一部が丸山町の大宇としてある。千歳村は比較的気候も温暖な半農半漁の長閑な漁村であったが、大正 12 (1923) 年には関東大震災の被害を受けた。この時に 538 戸の家が全壊し、死者 36 名、負傷者 15 名であったという (『安房郡誌』)。

この後、昭和 2 (1927) 年、千歳駅が開設され、同 4 (1929) 年には房総環状線が実現した。これは漁業のみならず、地域の産業全般の進展に大きく貢献したが、この頃、世界大恐慌の波が日本にも押し寄せ産業界に大打撃を与えた。また、この後、漁業振興のため港湾修築補助もあり、大地震で隆起した港が千倉新漁港として昭和 6 (1931) 年竣工した。水産実習所の設置、水産実習船「黒潮丸」の寄贈もあつて水産熱が高まった。この頃は地域を挙げて水産熱が高まった時期とされる。

今回、笹子家の史料には水揚げなどを記した帳簿は含まれていなかったが、前海の網漁では、鱈、鰺、平目、カマス、コノシロ、イシモチなどが水揚げされている。この辺りでは地曳網漁業も操業されている。近海では、鯖、鰹、マグロ類、烏賊、鰻、カジキ、秋刀魚、ブリ類、ムツなどが漁獲され、捕鯨も行われていた。採貝、採草漁も盛んで海士や海女が潜水作業に従事した (『千倉町史』)。

所蔵の文書 28 点は、笹子家個人の家の史料である。大半が帳簿 (横帳) だが、書状一通と活版の冊子が一冊含まれていた。この書状と冊子が残されていたことにより、当時、幅広く活躍していた笹子家の様子が推測される。また、本文書中に見える笹子姓の人物として、笹子丑松 (目録番号 4-1-2)、笹子栄次郎 (目録番号 4-1-1、4-9-1、9)、

笹子廣（目録番号 12）の 3 名の名がみえるが、丑松なる人物については不明である。

笹子家は、大正末までは網元として漁業を生業としていた家であった。また、海産物などの商いもしていた商家で、その他に、米、麦酒の^{つと}苞なども扱ったことが帳簿の記載から窺われる。現当主の笹子栄氏談によると、「漁業を止めたあとは、造り酒屋を創めた。ビールもやっていたかもしれないが、規模は大きくなく地元へ販売する程度だった。水が良い土地柄だったから造り酒屋を創めたのだろう。麦酒の^{つと}苞も作っていたがこれは隣家の安西さんと共同でやっていた」という（2004 年 12 月 11 日訪問調査）。栄氏談を裏付ける史料が残されていた。それらは、「麦酒苞金出入帳」3 点（目録番号 2、5、7-2）であり、史料中に「安西」の名がみえる。帳簿の記載には、商いだけではなく家庭内の出入も記入され、家族で家業に従事していたことが分かる。帳簿類としては、明治 42（1909）年 1 月 28 日「米代金出入帳」（目録番号 1）。明治 45（1912）年 4 月 1 日「春巾着入金帳」（目録番号 3）と、大正年間に作成された「春巾着網入用帳」10 点（目録番号 4-1~4-10）が伝存し、地先海で網元として漁業をしていた家であったことは明らかである。

大正 7（1918）年 10 月 1 日「秋刀魚網入用帳」（目録番号 6-1）、大正 8 年 10 月「秋刀送留帳」（目録番号 8）が残存する。大正 10 年~11 年にかけて、この辺りでは発動機船が次々と建造されたが、浮魚漁（秋刀魚、カジキ、飛び魚など）は潮流に左右されるため漁獲高は上がらなかった。元来、秋刀魚漁は江戸期に始まり、明治期に刺網漁法が導入されたが、大正から昭和期にかけて現在の棒受網漁法となった。昭和 20 年代には北海道沖合まで漁場が拡張され大漁が続いた時期もあった（『千倉町史』）。

巾着関係の史料はほとんどが入用帳であった。水揚高を示す史料や漁獲物売買に関する史料は残されていない。次に、水主として船に乗り込み漁をした漁師の給金控帳の「春巾着入金帳」（目録番号 3）を覗いてみよう。これは、明治 45 年~大正 11 年までの記録である。「明治 45 年 文蔵 一給金 拾貳円也 手付金十三円也 差引^メ金壹円下也、安五郎 一金拾貳円也 手付金十一円也 外金壹円留」などとある。手付金の方が多い場合もあることが分かる。大正時代になると、給金が 30 円代になるなど金額が大きくなっていくのが読み取れる。給料の額が当時の経済や物価と大きく関わっていたことが分かる。

この他に、明治 43（1910）年 10 月 10 日「苞買置帳」（目録番号 2）、大正 5（1916）年 1 月 1 日「麦酒苞金出入帳」（目録番号 5）、大正 8 年 9 月吉日「麦酒苞買入帳」（目録番号 7-2）が伝存するが、麦酒苞は安西氏と共同経営については、次のように記されている。「大正 5 年 6 月 19 日 会社 58 万 1200 本 内 5060 本 不用 金千九十四円六十七銭 内六十四円二十五銭運賃 内五十七円六十一銭歩合 差引^メ金九百七十二円八十一銭 一金二十銭飛脚 安西渡」（目録番号 5）とあり、「安西氏」の名がみえる。大正 6 年 7 月 20 日には、「麒麟会社」の名が記されている。「二十一万三千二百本麒麟会社 内二千五百二十五本 不用 仕切金五百二十一円六十三銭 五十九円六十三銭運賃及書留手数料 差引^メ金四百六十二円也」（目録番号 5）などとある。さらに、「麦酒苞買入帳」（目録番号 7-2）には、「安西殿宛請取（荷受章の印）」（目録番号 7-1）が括り付けられていた。

その他、年代は不詳であるが、北海道から届けられた昆布の採取などの商売に関する書状が 1 通残されていた（目録番号 11）。このように遠隔の地との商いの取引が行われる

ような自営業であったことが推測される。

この笹子家文書には、漁業組合と直接関係ある史料は含まれていなかったが、この地域（千歳村）には、明治 36（1903）年 6 月、白子漁業組合が制度的に成立している。この頃設立された他の漁業組合と同様、明治 34 年「漁業法」を請けて設立されたものと考えられる。大正 11（1922）年調査によると、組合員数 329 名となっている（『安房郡誌』）。漁業協同組合としての組織設定は、昭和 14（1939）年 4 月 27 日に行われ、その頃の組合員数は 324 名、出資金は 33,000 円である（昭和 17 年『全国漁業組合綜覧』）。白子漁業組合は、戦時体制下では白子漁業会となり、戦後は白子漁業協同組合、昭和 63（1988）年 9 月に合併して白子瀬戸漁業協同組合となった。さらに合併が進み、平成 9（1997）年 11 月、房州千倉漁業協同組合白子支所となり現在に至っている。

笹子家は基本的には半農半漁の家であったが、地元の漁業組合と深く関わりあった家であったことは確かである。この家の保管史料中注目されるものとして、千葉県水産株式会社によって作成配布された昭和 10（1935）年 3 月 31 日「第拾四期営業報告書」（目録番号 9）がある。これは、昭和 9（1934）年 4 月 1 日～同 10 年 3 月 31 日に至る 1 年間の営業報告書であり、株主に送付されたものである。文末には、昭和 10 年 3 月 31 日現在の「株主名簿」が添付されている。その「株主名簿」には、個人法人、合計 30,000 株 608 名分の氏名が掲載されている。千葉県内の漁業組合も株主として名を連ねているその中に、「千歳村白子漁業組合代表者 笹子栄次郎」の名がみえる。

（文責 鈴木江津子）